

四旬節第一主日（主日の福音を中心とする「霊的な読書」）

（一）聖書朗読

マタイ 4：1-11

イエスは悪魔から誘惑を受けるため、霊に導かれて荒れ野に行かれた。四十日間、昼も夜も断食し、悪魔の誘惑を三度退けた。これによって、イエスは、「神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」、「神である主を試してはならない」、「神である主を拝み、ただ主に仕える」ということを教えてくれた。そこで、悪魔は離れ去った後、天使たちが来てイエスに仕えた。

（二）カテキズムの響き（カトリック教会のカテキズムの番号；YOUCAT #523、525）

#538-540、2846-2849

福音書は、イエスはヨハネから洗礼を受けられた直後、一時一人過ごされ、霊によって、四十日間食を断って荒れ野に留まったと述べています。その間、サタンがイエスを三度試み、神への孝心を試練にかけようとしませんが、イエスが悪への誘惑を退けます。最初のアダムが誘惑に屈したのに対して、新しいアダムであるイエスは最後まで忠実を貫きました。また、イエスは、荒れ野で四十年の間、神を挑発していた民とは反対に、イスラエルの民の召命を完遂なさいます。さらに、御子として、御父への愛をもって、ご自分が神のみ旨にまったく従順な神の僕であることを表されました。教会は、毎年、四旬節の四十日間を通して、荒れ野でのイエスの神秘に心をあわせませます。

御父へ「私たちに誘惑に陥らせず」という願いを捧げることは、罪に導く道に足を踏み入れるのを放置なさらないようにとお願いします。肉と霊との戦いの際に、この願いは、識別と力との霊を感嘆し、試練と誘惑を識別するためです。試練は内的人間の成長に必要です。誘惑は罪と死に導くことなので、見た目には「おいしそうで、目をひきつけ、賢くなるように」（創世記3:6）見えるものであっても、実は死なのです。「誘惑に陥らない」ためには、心からの決意が必要であり、霊の導きに従って生きていること。また、御父は力を与えてくださり、試練に向かって、耐えられないようなものはなかったはずで、人間における種々の戦いと勝利は祈りによって可能になります。だから、御子であるイエスは、救い主のメシアとして、サタンがイエスに持ち掛けたこと、人々がメシアに期待したことに対して、勝利を収められます。

（三）カテキズムの学び（『コンペンディウム』カトリック・カテキズム要約の番号）

#106 四旬節という意味：

悪への誘惑に打ち勝ち、回心によって、主の過越しを迎える時期である。

#596 天におられる私たちの父へ「私たちは誘惑を陥らせず」という願いの意味。

最後の祈り：

命の源である神よ、主イエスは、四十日の荒れ野の試みを通して、悪への誘惑に打ち勝つ道を示して下さいました。四旬節の歩みを始める私達を導き、日々あなたの言葉によって生きる者として下さい。また、洗礼志願者の信仰を強め、彼らの心を照らし、回心の道を歩むことができますように。私達の主イエス・キリストによって。アーメン。